

伊藤勝彦教授のご退任にあたって

久保光志

いつの間にか時が経ち、この3月で伊藤勝彦教授も定年を迎えられ、東京女子大学を離れることになりました。先生はちょうど10年前、文理学部の哲学科に赴任されたのですが、そのとき共に赴任された山本信先生も、その後学長を務めてこられました。が、くしくも同じこの3月にその職を退かれることになってしまいました。私が東京女子大学に来たときには、大貫隆先生が入れ違いに東京大学に移られましたが、まだ山本先生も哲学科にいらっしゃり、また荻野弘之先生もおられました。その後、山本先生が学長になられて、研究室を離れ、荻野先生も上智大学に移られ、伊藤先生を除いて初めの頃のメンバーがいなくなっていました。心のなかで寂しさを感じてでしょうが、先生はよく冗談めかして「そして誰もいなくなった」などと口にされていました。が、先生がいなくなって、残された現哲学科のメンバーにとっては、本当の意味で「そして誰もいなくなった」訳で、伊藤先生のユニークな個性に、少なくとも研究室では触れることがなくなり、実に寂しい気持ちがします。

さて伊藤先生は東京大学文学部哲学科を卒業された後、大学院に残って研究を続けられ、昭和38年北海道大学文学部哲学科に赴任されて、若き助教授として大学教師のスタートを切られました。その後昭和46年に埼玉大学の教養学部に移られ、教養学部の哲学コースの充実に努められましたが、昭和63年本学文理学部の哲学科に赴任され、以来哲学科の基礎を固めるために努力してこられました。先生の学問の基礎はデカルト、パスカルなど17世紀のフランス哲学ですが、狭い専門に閉じ込めることなく、様々なことがらに関心を持ち、文学、芸術にも造詣が豊かでした。このことは先生の著書にあたれば明らかなことですが、先生は処女作『デカルトの人間像』以来ほんとに多数の著書、論文、編著を出版されています。最近も次々に書物をお書きになられています。一昨年には女子大での講義をもとに『哲学への情熱』（勁草書房）という本も出されています。

私が伊藤先生を知ったのは、もう随分前になりますが、学生時代、東京大学の教室でした。ちょうど先生が北大から埼玉に移ってこられた頃ではないかと思いますが、東大に講師でこられ、デカルトの講義をされたときです。多数の一人としてであり、あまり勤勉な学生でもなかったのも、先生のほうは私のことを知る由もなかったのですが、そのとき買った『デカルトの人間像』は今でも持っています。その後私は美学を専攻したこともあり、東京女子大に来るまで、伊藤先生との接点もなかったのですが、長い間

を置いてお会いしたのに、先生は依然とほとんど変わっておられず、精神の若々しさと気力に満ちておられました。この何年間かは、お母様が亡くなられたりし、心労が重なったこともあって、体調がすぐれないご様子でしたが、哲学に向ける若々しい気持ちは変わることなく、否むしろそういうときこそ、気力を振り絞って心を哲学に向けなければならないというように見受けられました。この哲学への「情熱」というか、先生好みの言い方をすれば「片思い」というか、これがやはり、先生の核をなすもので、長い学者生活をこの「情熱」を心に抱いてこられたのだと思います。研究室で、折々お話を伺うとき、他の哲学者を批評するときも、何よりもこの「情熱」を持っているかが評価の基準になっていました。

この意味で、デカルトを専門とする研究者としては意外と思われるかもしれませんが、先生は「理性」と共に、というかそれ以上に「情」の人でもあると思います。デカルトというと「合理主義」という言葉が浮かぶかもしれませんが、デカルトはまた17世紀に生きた人として、バロック的な側面、『情念論』のデカルトがありますし、私などはデカルトの「理性」を語る文体の背後にも、何か暗い情念を感じるような気がします。おそらく哲学の営みは、この情念、「知」への愛がなければ成り立ち得ないものではないでしょうか。そして先生は学生に対してもこの「知」への情熱を訴えることを最後まで断念されず、この「情熱」を学生たちと共有することを求めておられたのだと思います。先生は普段でも学生のことには何かと心を砕かれ、側から見ていて、先生は本当に人間が好きなのだなあと感じたことが時々ありましたが、先生の「知」への愛は人間への愛、学生たちへの愛と一体になっていたのだと思います。

本年1月には先生の最終講義が行われましたが、このような先生の人柄を受けて、女子大だけでなく、北大や埼玉大から以前先生の薫陶を受けた方たちが多数詰めかけました。先生はこの講義で、デカルトの孤独な「炉部屋」の思索を批判され、人間を共感的に他者とつなげる「情感的存在」であると捉えなければならないことを論じられましたが、出席した人の大部分は、そこに先生の「思い」を聞き取ったのではないのでしょうか。これはまったく私の勝手な推測に過ぎませんが、しかしそこにまた先生の「寂しさ」もあったのではないかと思います。「愛」の情熱によって人間同士が一体化する、そこにおそらく究極的な理想があるとしても、しかしこれは現実においては、他者が他者である限り完全な形では満たされず、「同一性」の理念には常に「非同一性」が入り込んでいることもまた事実であると思われます。そうではあるとしても、しかしこの理念を掲げ、そのために語り続けなければならないというところに、先生の「思い」はあったのではないのでしょうか。どうか今後ともこの「思い」を語ることで、我々を鼓舞し続けてもらいたいと願っています。